思想を語るメディア——近世日本を例として——

澤井啓一

近年、さまざまな領域でメディア論が盛んになってきており、その結果、多くの成果も得られている。メディアという視角によって主題とされるべき位相は、それぞれの領域によって異なるであろうが、本シンポジウムでは、思想史研究におけるメディア論の新たな可能性の追求、それによって思想史研究の新たな動向が切り開けるような議論の提起を目指したい。

思想史研究の多くが「すでに語られた／書かれた資料」を対象としている以上、メディアに関する問題を避けて通ることはできないであろう。すなわち、近世日本を例にとれば、メディアとして何を選択したかという問題は、大多数の儒者における「漢語文」、益軒等における「俗語（日本語）文」、国学者における「擬古（日本語）文」などといった、それぞれの思想の存在要件そのものに関わる問題へと発展する。これにオーラルによる伝達や出版メディアの発展といった問題を加えるならば、メディアをめぐる議論はさらに複雑化するばかりでなく、発信する側を中心に構想されていた従来の思想史を見直し、受け手とされていた読者・聴衆を中心化するような思想史を切り開くことだろう。

もう少し本シンポジウムのテーマに踏み込んで述べるならば、メディアを字義通りに捉えて「媒体」と理解

するだけなら、さきに述べたように思想史研究の多くが「すでに語られた／書かれた資料」を対象としている以上、いままで不十分であったところを補うことはできても、新たな問題提起とは言えまい。ここでは、メディアの意味をあえて広げて「媒介」と定義づけることから出発したいと考えている。つまり、ある思想の、時間的・空間的広がりを解明する場合に、そこにおいて何が「媒体」となっていたかという固定された議論でなく、そうした広がりを可能ならしめた要件、「媒介」という事態そのものを、さまざまな角度から具体的に検証することから始めようということである。それによって、「媒体となったモノ」ばかりでなく、「媒介する人々」をもメディア論の対象として組み込むことができることになる。

「媒介する人々」とは、ある思想家の門人・弟子とか、ある書物の出版・流通に直接携わった人々に限定されるのではない。直接・間接にかかわらず、ある思想の広がりに関与した人々すべてが、まさしく「媒介する人々」となるということである。また「媒介する人々」とは、文学理論において「読書行為」がきわめて主体的な行為とされたことを例にとるまでもなく、思想の実践主体そのものである。思想の時間的・空間的広がりを、従来のように影響とか受容として描くのではなく、主体的で実践的な行為として再現すること、これが今回の議論が目指す地平である。

本シンポジウムでは、パネラーとして高橋章則氏・福田千鶴氏・若尾政希氏を、コメンテイターとして宇野田尚哉氏・小林准士氏を招き、思想史研究におけるメディア論の現在と可能性について、さまざまな角度から具体的に検証することから始めたい。また本シンポジウムでは、結果として、近世を対象とする発表ばかりになってしまったが、ここで討議される内容が、日本思想史研究における他の時代、さらには思想史研究そのものにとって意義あるものになるべく、多くの会員の活発な発言を期待したい。

（恵泉女学園大学教授）